

# デザインノートと共創的都市デザイン戦略

福島 秀哉<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 博士(工) 株式会社 上條・福島都市設計事務所  
(〒113-8654 東京都新宿区住吉町10-5鍋倉ビル2階, E-mail:fukushima@kfa.co.jp)

縮退時代においては、各地域の特性に合わせて都市の縮退と地域力の向上を同時にかなえる、新しい都市デザインやまちづくりの手法が求められている。本稿は、東日本大震災の復興事業において提案され、その後各地のまちづくりで展開されているデザインノートによる、ヴィジョン化 (Visioning) を通した、共創的都市デザイン戦略の取組みについて論じるものである。

キーワード: デザインノート, 公共デザイン, 都市デザイン戦略

## 1. はじめに

### (1) 背景

これまでの都市計画や都市デザインは、都市の成長を前提に、インフラ整備によりその成長を支え、都市計画により土地利用をコントロールして適正化することを中心に発展してきた。住民参加やまちづくりなどの取組みもその前提のもとにおこなわれてきた。しかし人口減少・少子高齢化により、都市の縮退を前提とする、縮退の時代となったことで、計画やまちづくりの前提条件が大きく変わった。今後は、その中で各地域の特性に合わせた地域再生、都市再生を実現していく必要がある。つまり、縮退の時代においては、各地域の特性に合わせて都市の縮退と地域力の向上を同時にかなえる、新しい都市デザインやまちづくりの手法が求められているといえる。

都市計画の分野でも、縮退の時代の都市計画の立て方について、総合計画や基本構想を上位におき、各種課題別の計画をぶら下げていく「ツリー型の計画構造」から、一つひとつの計画をつくりながら、行政の内部の組織と市民のコミュニティをつくり、そのコミュニティに裏打ちされたネットワーク上の構成をめざす「プロセス型の計画構造」への転換が提案されている<sup>1)</sup>。この計画構造の転換を公共事業や空間デザインとどう連携していくかは都市計画と土木デザイン分野の横断的課題である。

また近年、ウォークアブル、タクティカルアーバンイズム、グリーンインフラ、かわまちづくりなど、様々な都市再生手法や、公共事業関連の施策が推進されているが、共通して行政団体、民間事業者、地域住民など、多主体の協働が不可欠である。

さらに環境再生や復興事業のような、プロジェクトの範囲が広く、長期の取組みの中で多様なステークホルダ

ーの参画が求められるケースでは、具体的デザイン (Design: 土地利用, 空間計画等) の前に、ヴィジョン化 (Visioning) さらにはその前段階の調査 (Research) と、各段階での共創的プロセスの実装化が求められる。この共創的な都市デザイン戦略の実践においては、特にプロジェクトを構成する個別具体の計画・デザインの前段階での、ヴィジョン化 (Visioning) とその共有がとても重要となる<sup>2)</sup>。

本稿は、東日本大震災の復興事業において提案され、その後各地のまちづくりで展開されているデザインノートによるヴィジョン化 (Visioning) を通した、共創的都市デザイン戦略の取組みについて論じるものである。

### (2) 近年の都市再生に向けた取り組みの傾向

長期にわたる都市デザイン戦略として、ヴィジュアルを伴った都市空間の将来像や、段階的な計画内容が提示される事例が増えてきている。

例えば神戸市三宮の都市デザインでは、都心三宮デザイン調整会議より「「えき\_まち空間」・「税関線」における公共空間の整備に向けた計画や、周辺の建築空間のあり方を示し、公共空間と沿道建築空間が一体となった魅力的な都市空間のデザインを市民や民間事業者の皆様と共有するために」、「景観デザインコード」を策定している。その中で都市分析にもとづき、目指す都市像を具体のデザイン提案を含めて提示している<sup>3)</sup>。

また沼津市では、2018 (平成30) 年より中心市街地まちづくり戦略会議を開催し、2020 (令和2) 年に沼津市中心市街地まちづくり戦略を策定した。その中で4つの戦略として、戦略Ⅰヒト中心の公共空間の創出、戦略Ⅱ拠点機能の立地促進、戦略Ⅲ街中居住の促進と市街地環境の向上、戦略Ⅳ周辺地域資源との連携を掲げ、それぞ

れに方策が描かれている<sup>4)</sup>。その後、まちづくり戦略に基づく都市空間デザインガイドライン、公共空間再編整備計画の策定や、社会実験を通じてヒト中心のまちづくりを推進する「OPEN NUMAZU」の取組みなどが進められている。

これらの取組みと、本稿で紹介するデザインノートを通した都市デザイン戦略の立案は、その背景、目的、施策上の位置づけにおいて共通する部分が多い。一方、これらの計画を示す各資料が基本的に丸と矢印による計画方針と、イメージパースなどのシーンによって表現されていることが多いのに対して、デザインノートは、後述すように平面図を基本とし、具体的な空間デザインの方針や活用のイメージを表現しつつ、エリア全体の取組みの関係性を俯瞰的に見ることができるところに特徴がある。

## 2. デザインノートの経緯と特徴

### (1) デザインノートの経緯

筆者らが、デザインノートを初めて作成したのは、岩手県上閉伊郡大槌町における東日本大震災復興まちづくりにおいてである<sup>5)</sup>。復興区画整理事業、防災集団移転促進事業等、多くの整備事業が並行して進められる中、ワークショップ（以下 WS）等を通した地域住民の意見をベースとする各整備内容の留意点と関係性を平面スケッチとコメントで表し、担当部局・整備時期の異なる各事業間の連携を可視化し、各地区の将来像を空間イメージとして示した（図-1）。大槌町のデザインノートは、地域住民への説明資料、職員同士の引継ぎ資料や、各整備内容の留意点の根拠となる住民意見、配慮すべき事業間の関係などの確認資料として活用された。

山梨県南都留郡山中湖村のまちづくりにおいては、並行して検討される各公共事業と、地域のまちづくり活動、地域の伝統文化や空間的な特徴を調査・整理し、地域の現実的な将来像がデザインノートとして描かれた<sup>6)</sup>。デザインノートは、村の広報誌や村内各箇所に掲示され、地域のまちづくりの方向性を役場内の各部署や地域住民と共有するのに活用された（図-2）。

筆者は、その後各地の共創的都市デザイン戦略の立案が求められる事業において、デザインノート、さらにはそれらを束ねたまちづくり構想の策定に携わっている。詳細は3章にて述べる。また大槌町の復興事業で吉里吉里地区のコーディネーターを務めた国土館大学の二井昭佳教授も、その後町田、狛江などの地域づくりにおいてデザインノートを作成している<sup>7)</sup>。本論で紹介するデザインノートと比べ内容がより多岐にわたるが、空間デザインによりヴィジョンの提示をしている点は共通である。

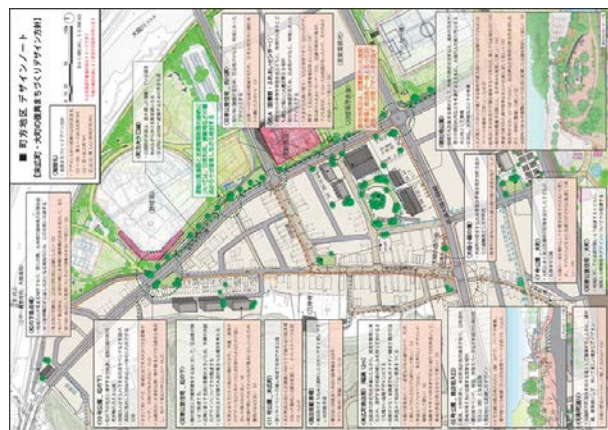


図-1 大槌デザインノート（大槌デザイン会議）



図-2 山中湖村デザインノート（山中湖村デザイン戦略会議、平野区）

### (2) デザインノートの特徴

ここでは、デザインノートの特徴について紹介する。現在デザインノートの定まった定義がないため、筆者がデザインノートの策定の際に留意している特徴についていくつか提示したい。

デザインノートとは、従来の「ツリー型の計画構造」を前提とするスローガン-トップダウン型の計画づくりに対して、「プロセス型の計画構造」を前提とするボトムアップ連関型の計画づくりを指向している。具体的には、異なる事業主体や部局の公共事業、地域の個々のまちづくり活動、地域資源や歴史的特徴、それらに対する主体的な住民意見を調査（Research）し、空間イメージと各取組みの関係性を考えながら現実性のある戦略的な地域ビジョンとして描くものである（図-3）。

デザインノートは平面図を基本とし、A3サイズで1/2000~1/2500のスケールで収まる範囲を表現している。大槌や山中湖のデザインノートでは手書きスケッチにより表現していたが、作業分担上 illustrator で作成することもある。スケールは、具体的な空間デザインの方針や活用のイメージが表現できつつ、エリア全体の取組みの関係性を俯瞰的に見ることができるよう設定している。

	従来のビジョン (トップダウン分担型)	デザインノート (ボトムアップ連関型)
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スローガン+概念図+(イメージパースなどのシーンイメージ)</li> <li>・個々の事業や活動間の関連性が見えづらい</li> <li>・個々の事業や活動をとりまく状況によって変化→計画と現場の乖離</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の将来像を空間イメージと共に描く</li> <li>・公共事業とまちづくり活動の関連性を考える (担当部局・事業期間の異なる事業間の連携を含む)</li> </ul>
計画と各事業・取組みの関係性		
※参考 計画構造の転換		

図-3 計画と各事業・取組みとの関係にみるデザインノートの特徴

このスケールの平面図の中に、公共事業による整備イメージからイベント等の使われ方まで、多主体の取組みの様子が一連のまちの風景としてつながっていく様子を可視化することを試みている。言い換えれば、実現性が高いまちの将来像を各要素のつながりを想像しながら描いた、地に足の着いた将来ビジョンともいえる。これにより、行政職員からまちづくりに関わる地域住民までが、自分の関わるプロジェクトと並行して起きうるまちの変化と可能性を直感的に把握し、自らの活動にフィードバックすることが可能となる。この点にデザインノートが、共創的都市デザイン戦略に寄与するポイントがある。次章では、具体的プロジェクトを通して、その効果について紹介する。

### 3. デザインノートによる空間デザインと都市デザイン戦略の連携

#### (1) 愛媛県大洲市肱川かわまちづくり

肱川かわまちづくり(第1期計画)は、国土交通省大洲河川国道事務所と大洲市によって、2020年3月にかわまちづくり支援制度に登録され、その後協議会、WSを通して水辺の利活用や整備内容についての検討が進められている<sup>8) 9)</sup>。

筆者らは、当初水辺活用のための階段護岸の整備に向けた検討業務としてプロジェクトに参画した。しかし、階段護岸を含む水辺拠点整備の都市デザイン上の位置づけから議論すべきと考え、河川整備事業として進められ

る水辺拠点などの各整備内容と、大洲市がおこなう街側の公共事業、民間の取組み、地域のまちづくり活動、歴史性等の関係を可視化し、協議会やWSなどを通して関係者と情報共有するためにデザインノートを作成した(図-4)。

このデザインノートにより、かわまちづくりが河川に閉じた話ではなく、堤防によって断絶されてしまった肱川とまちをどうつなぐかという計画であることを関係者と共有することができた。また、川とまちの回遊性向上のために提案していた肱川橋橋詰の階段広場が、国交省と大洲市の協働により整備検討されるなど、異なる事業主体が連携する都市デザインの実現にもつながっている。このように、肱川デザインノートは、単発の整備を都市デザインに展開していることに寄与する「プロジェクト展開型」のデザインノートといえる。

#### (2) 愛媛県今治市中心市街地まちづくり構想

今治市の中心市街地は、2006(平成18)年の西瀬戸自動車道(しまなみ海道)の全線開通による航路再編、人口減少少子高齢化の進行などの複合的な要因により、商店街の衰退、百貨店の撤退など、多くの課題を抱えている。市は中心市街地の持続的かつ具体的な再生に向け、2022年度より今治市中心市街地まちづくり構想(以下、まちづくり構想)の検討をはじめた。筆者らはこの検討業務の中で、デザインノートの作成を通したまちづくり構想の策定を進めた。

このまちづくり構想の検討は、建築や公共施設などの具体の整備対象の検討前の段階で、都市デザイン戦略の

立案に向けてスタートした。そこで、今治市の中で現在主体的にまちづくりを進めているプレイヤーの方々にヒアリングをおこない、それぞれの活動の展開に向けて中心市街に求めることを尋ね、それらの情報を基にデザインノートを作成した。また市が検討している公共施設再編の素案も合わせて検討をおこなった。

その成果は、中心市街地の各エリアのまちづくり方針（案）、全体の将来ビジョン、各デザインノートとしてまとめられた。2023年度より、今治市中心市街地創生デザイン会議と公共施設等再編部会、公共空間再編部会が設置され、これらの計画の確度の向上、関係者との共有、協議等が進められている。その中で具体的な整備内容に向けた議論もおこなわれる予定である。このように今治デザインノートは、都市デザイン戦略から個別の整備の検討を進めていく「都市デザイン戦略検討型」のデザインノートといえる。

#### 4. おわりに

##### (1) デザインノートの展開可能性

筆者らは上記の2つのプロジェクト以外にも個々の整備に関するデザインに加えて、デザインノートによる都市デザイン戦略の検討をおこなっている。行政職員と議論すると、これらの都市デザイン戦略への行政ニーズは高まっているといえる。

また筆者らが計画概念として提示した「公共デザイン」の中でも、インフラ整備の効果を最大化するために重要なこととして、「エリアビジョン」（地域の将来像）の設定と「戦略性」の導入指摘されている<sup>10)</sup>。デザインノートはこの公共デザインの推進にも寄与するものと考えられる。

##### (2) 今後の課題

ここでは、デザインノートを通した都市デザイン戦略を進める中で議論されている課題について示す。一つ目は、長期的に多主体のまちづくりを推進する体制・状況をどうつくっていくかということである。この解決に向けては、例えば都市再生整備計画策定に対して、デザインノートによるビジョンと各事業の位置づけを反映していく可能性が考えられる。

二つ目に、このビジョンづくりの段階をどう業務としていくかという課題がある。これに対しては、総務省の地域力創造アドバイザー制度の活用による事業の前段階の調整・検討や座組みの検討の可能性が考えられる。

また、公共事業費の減少等もあり、官民連携の推進が推奨されるなかで、公共事業を軸とする都市再生事態を

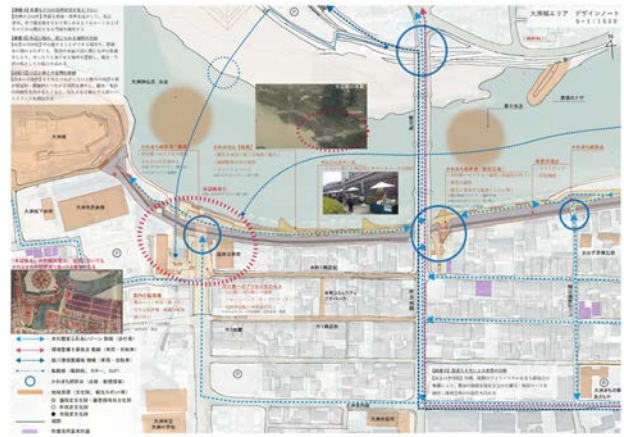


図4 脇川デザインノート（大洲城エリア）

どう考えていくか、という課題が考えられるが、経済的人的資源が厳しくなる地方部の都市再生において、各事業・活動の連携を強化し、それぞれの効果を最大限にしていける努力はいずれにせよ必要不可欠だと考えられる。関連して、整備効果の最大化に向けては、精緻な都市分析と計画との連携の検討も重要な課題である。最後にデザインノートによるビジョンの表現の方法論については、共創的プロセスにおいて大切な役割を果たすため、今後引き続き検討していく必要がある。

#### 参考文献

- 1) 饗庭伸：都市の間診，pp.170-171，2022
- 2) 上林就，福島秀哉：河川環境再生に向けた広域空間計画における市民参加型検討プロセスの特徴-ニュージーランド・クライストチャーチにおけるオタカロ・エイボン川回廊再生計画を対象として-，都市計画論文集，Vol.57，No.3，pp.1257-1264，2022.10
- 3) 神戸市都心三宮デザイン調整会議：神戸三宮「えき～まち空間」・税関線 景観デザインコード，2022
- 4) 沼津市：沼津市中心市街地まちづくり戦略，2020
- 5) 福島秀哉，二井昭佳，岡村健太郎，五三裕太著：コミュニティのかたちと復興区画整理 大槌町町方・吉里吉里地区の地域デザイン，鹿島出版会，2023
- 6) 福島秀哉：ムラナカの公共デザイン 山中湖村の生活文化と景観まちづくり，東京大学出版会，2023
- 7) 狛江市未来戦略会議：多摩川周辺エリア未来デザインノート，2022
- 8) 脇川かわまちづくり協議会：脇川かわまちづくり（第1期）水郷文化とともに育ち続けるかわまちづくり，2020
- 9) 五三裕太，福島秀哉：脇川かわまちづくりにおける河川利用の推進を目的とした河川管理施設の計画検討プロセスの特徴，土木学会論文集（土木計画学），2023
- 10) 山口敬太，福島秀哉，西村亮彦：まちを再生する公共デザインインフラ・景観・地域戦略をつなぐ思考と実践，学芸出版社，2019